

第1回気仙沼市震災復興市民委員会 議事速記

日時	2011年6月21日(火) 16:00 ~ 19:15
場所	気仙沼市役所 3階会議室
参加者 (敬称略)	奥原 しんこ(イラストレーター) 小野寺 靖忠(株オノデラコーポレーション専務取締役) 小山 和美(宮城県気仙沼西高等学校教諭) 小山 裕隆(コヤマ菓子店専務, 気楽会代表) 木戸浦 健欽(木戸浦造船(株)取締役) 齋藤 玲紀(日本マイクロソフト株式会社 MSN アジア・太平洋 SEO&ソーシャル・メディアリード) 高橋 正樹(株気仙沼商会代表取締役社長) 武山 健自(株イーシンコミュニケーションズ代表取締役) 千田 満穂(気仙沼商工会議所副会頭, 気仙沼三菱自動車販売株式会社代表取締役社長) 千葉 一(総合地球環境学研究所共同研究員, 東北学院大学非常勤講師, 宮城学院大学非常勤講師) 畠山 信(水山養殖場(唐桑), NPO 法人「森は海の恋人」副理事長)
	[気仙沼市] 市長 菅原茂、副市長 加藤慶太
	[三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング]
	岡本(義)、伊坂、岡本(泰)、矢島(記)

【議事次第】

- 1.開会
- 2.あいさつ
- 3.委員会の体制等について
 - (1)会議の公開・非公開について
 - (2)計画策定体制, スケジュールについて
 - (3)委員会の体制について(名称, 要綱, 議長)
- 4.意見交換
 - (1)自己紹介
 - (2)委員会の進め方について
 - (3)市民意見の把握について
 - (4)その他
- 5.閉会

【次回開催予定】=====

- ・ 6/26(日) 13時～ 第2回気仙沼市震災復興市民委員会

【議事詳細】=====

【市長より挨拶】

- ・ (仮称)気仙沼市震災復興市民委員会の初会合である。全員にご参加いただき、ありがたい。
- ・ 本日までに 977 名の死亡が確認され、いまだ 430～440 名不明者がいる状況。町の復旧も、何合目と言えない状況だが、一方で復興も進めていかなければならない。
- ・ この委員会では、市民のみなさまの多くの意見をいただく。みなさま自身の意見と、みなさまがアンテナになって市民の意見をまとめていただく。
- ・ 「復興会議」と「市民委員会」の性格の違い 「復興会議」は計画を実施する際、予算・法令と折り合いをつけながら進めていく。しかし、「市民委員会」は、こうしたものにあまり捕われず、「自分達の住みたい気仙沼」という視点で提言をいただく。
- ・ スケジュール できるだけ多くの話し合いをいただきながら、希望の持てる結果を出したい。

【委員紹介】 司会より氏名読み上げ

- ・ 市長が仮議長として議事進行

【会議の公開・非公開について】

武山委員:これからもずっと公開ということになるのか

市長:そうだが、今回は特別に非公開でという要望があれば、申し出ていただきたい。

- ・ 異論がなく、気仙沼市情報公開条例に基づき、公開とする。
- ・ 議事録、会議資料等については、広報や HP を通じて開示する予定

【計画策定体制、スケジュールについて】

◆資料4・資料3

※ 企画部長より、資料4・資料3をもとに、計画策定体制について説明。

◆資料5

※ 企画部長より、資料5を元に、計画策定スケジュールについて説明。

市長より、内容確認。

・市街地復興パターンの検討調査の中で、住民意向調査をするが、その設問についても、この市民委員会のみなさまのご意見を反映させることができる。

・市民委員会の開催回数は5回では足りないと思う。回数は重ねていきたい。

◆質疑応答

小野寺委員:離れた場所から参加するために、テレビ会議という方法をとることができるのか。

市長:市民の会議なので、みなさまの意見で決めていただければよいと思うが、常に外からの意見をいれるのがよいのかどうかという問題もある。この後の議論で、みなさまで検討いただくとよい。

小野寺委員:外から意見をもらうというより、中継するというイメージ。委員が東京や気仙沼以外にいらっしゃる場合も、参加いただけるようになる。

市長:私はよいと思いますが。いかがでしょうか。

異論がなく、賛成。

武山委員:提言は、9月までという期限はあるのか。

市長:9月以降も、広い意味での提言をもらう。

副市長:最後にまとめて意見をいただいただけだと、復興会議に反映できない。都度、会議でいただいた意見を復興会議に反映していく。それだけだと形として残らないので、最後には、提言という形でもまとめる。

高橋委員：要綱を読んでもよくわからないが、この市民会議は、議論したものを復興会議に反映させていき、そのことが成果となるのか。

市長：市民委員会の議論の内容は、復興会議に反映させるが、市民委員会の提言というものも9月末までに取りまとめる。副市長の説明のとおりである。

高橋委員：復興会議で出すものと、こちらで出すものに違いが出るのか？

市長：復興会議の提言は、網羅的でなければならない。市民委員会は、みなさまのご関心で強弱があったり、一部であってもかまわない。

副市長：資料1と資料2がある。資料1は市民委員会の要綱。資料2は復興会議の要綱。市民のみなさまに広く市民の視点からの意見をいただく。

齋藤委員：まだ成果物のイメージがわからない。提言を出す際の制限はなにかあるのか。どのくらいのスパンを想定して提言するのか。予算や実現可能性なども考慮する必要があるか。

市長：県は10年という設定で計画策定を進めている。これが、一つの目安だと考える。予算のことは考えなくてよいと言ったが、国の支援を得て市ができるとか、ある程度の範囲で考える必要がある。

齋藤委員：まちづくりと言っても、ハード面・ソフト面あるが、どういう範囲で考えるのか。そのあたりの大きさのイメージがつかないので、ガイドを出していただけるとよい。

市長：市街地の活用方針などにとどまらず、広い意味での社会システムなども含まれると考える。

千田委員：この委員会は、復興会議の下部組織なのか？

市長：上下はない。横というのがよいかどうかわからないが、復興会議でも市民の意見を入れていくことが重要という認識があり、この市民委員会の意見は十分反映させる。復興会議は、私が座長なので、十分な反映をさせる。そうでなければ、市民の会議を立ち上げる意味がない。復興会議が網羅的な計画を取りまとめる。市民委員会は、網羅的でなくても、みなさまが重要と思う意見をいっていただき、復興計画に反映させていく。

千葉委員：千田委員の意見に感じるところがある。国会の両院協議会のようなものも必要ではないか。それが難しいようであれば、双方の委員が、数名ずつ、互いの会議に出席するようなことも考えられるのでは。

副市長：復興会議と市民委員会は、互いに補完する関係である。今回は、間に合わなかったが、本来、前回の復興会議の議事内容を資料として配布して、みなさまの復興会議の議論に対する意見をいただくということもやっていきたい。市民委員会と復興会議との意見交換も適宜行っていきたい。

【委員会の体制について：名称，要綱，議長（協議）】

◆資料1 ※企画部長より資料1を用いて、委員会に関する説明。

畠山委員：名称はこのままでよいのではないかと。時間がもったいないので。

満場一致で、「気仙沼市震災復興市民委員会（以降、「市民委員会」と記述）」に決定。

畠山委員：第三条で、市民のニーズを吸い上げとあるが、唐桑に100くらいの支援団体があり、ニーズのマッチングをしているが、支援団体の方々が市民ニーズをよく知っている。各地域で活動する支援団体の方にも参加していただくとニーズを吸い上げられるのではないかと。（畠山委員から配布されたペーパー参照）

小野寺委員：そういう人たちの意見を吸い上げるために、委員がいるのではないかと。

畠山委員：委員の中で、支援団体と活動している人はいるのか？私だけだと、一人で全地域のニーズを代表することになるが、それでいいのか？

小野寺委員：それでよいのではないかと。そうでないと漁業団体等様々な関係者もたくさんいるので、収集しきれないのではないかと。

市長：色々な団体から、市への提案もある。大学が気仙沼をフィールドとした復興案を作成して

いるということもある。そうした活動をくみ上げる必要があるのではないか、という意見も(復興会議から?)あるので、吸い上げる窓口を作ろうと考えている。ホームページ等で、私も意見をみているが、私だけでなく、みんなでみていけるような環境をつくろうと考える。大学や研究機関などは、直接市にプレゼンしたいという話もあるので、そうしたものも聞いていきたい。

副市長: 畠山委員の意見は、重要だと考える。要綱の第2条2行目にあるようにインターネットの活用ということをやっていききたい。委員会の名前でサイトを立ち上げて、意見を吸い上げるという手も例としてあるのではないか。

千葉委員: 建設的な意見だと思う。仮設住宅ができたが、色々な団体や社協が次々と訪問してきて忙しくて寝ていられない、という被災者の意見もある。もっと、団体の横のつながりを作るべきであり、その役割を担うのは、社協だと思う。社協の人に一人入ってもらって、支援団体の意見を代表してもらうのがよいのではないか。

畠山委員: 唐桑では、支援団体が定期的に集まって情報交換している。今のところ、このネットワークに社協は参加していない。社協に関わってもらおうとよい。

市長: 社協の関わりというのは、現在の被災者、特に避難所や仮設で暮らしている人についての話か。

千葉委員: 支援団体の中には、長いスパン(5年くらい)で考えているところもある。

副市長: 会議の委員というのは、ある程度の規模でまとめていく必要もあり、経験上、今くらいの人数が適切と考える。ただし、要綱第4条に、リーダーは、必要があるときは、関係者の出席を求め・・・とあるので、こうしたものを活用してもらいたい。

市長: 市民委員会の役割がどこまでかということではないか。社協や市役所がやるべき仕事、機能が十分に果たせていない部分があるので、こうした意見が出てくる。市民委員会で復興に向けての計画を取りまとめる話と、役所が被災者支援や関係者の横の連携等に役割を果たしていくということは、平行して進めていかねばならないと思う。

千田委員: 様々な問題はあるが、大きな目で見たときに、何が今重要かということ、地盤沈下で主要産業が壊滅的打撃をうけている。これは時間との戦いである。このテーマを復興会議と市民委員会で話し合っていくことが重要ではないか。絞って議論していく必要があるのではないか。

市長: 多くの市民の期待は、早くどうなるのか方向性を示して欲しいということ。示せるものは、できるだけ早く、途中段階でも示していききたい。また、意見を広く聞くということは、関係者を会議に呼んだり、サイトで意見募集をするなど、様々な形で行っていく。

要綱は、異論なく、提案の内容で決定。

リーダーについて

武山委員: 気仙沼に住んでいる方をお願いしたい。年齢的にも中間の方がよいと思うので、高橋委員をお願いできないか。

満場一致で、高橋委員に決定。

リーダー挨拶

この1時間の議論を聞いただけでも、非常に熱い議論があり、今後がんばっていかねばならないと感じた。9月にみなさんがやってよかった、10年後にもよかったと思えるような議論をしていきたい。サブリーダーは、やはり地元在住の小野寺委員をお願いしたい。市外の委員のみなさまの意見を2人でしっかり受け止めていきたい。

【委員自己紹介】

奥原委員：東京でイラストレーターをしている。震災後、たびたびボランティアをしながら、何か役に立てないかと考えていた。

小野寺委員：魚関係で市内の水産業者と関わっている。コーヒー屋で、色々な人と出会う機会がある。水産業の人からは、期待がある。色々な意見を持ってくる。

小山委員：家庭科で、災害以降「暮らしをみつめていく」ということを教えている。暮らしをみつめる視点から、参加していきたい。

小山委員：菓子店経営。ここに来て、わくわくしている。自分の役目を毎日考えている。講演会で市長が、「覚悟を持って」と言っていた。そういう言葉を市民ももっと聞きたいと思うし、建設的な意見が出ると思う。ここでの情報をリリースすること、市民の意見を吸い上げること。優しく幸せに早く復興させるためのキーパーソンになる。

木戸浦委員：造船業。気仙沼に来て4年目。それまで、海に近いところを国内外問わず転々としてきた。複合的な視点から意見を言えればよいと思う。

齋藤委員：マイクロソフト。気仙沼高校を出て、気仙沼を離れた。マイクロソフトという会社で働き、外資系のコンピュータ関係なので、情報設計をどうしていくのか、情報格差の解消策、グローバルな視点から次の世代の気仙沼にいかせるのではないかな。外資として、日本の組織とは違うやり方、過程を改善していく提案などもできるのではないかな。

高橋委員：地元で漁船の燃料補給、ガソリンスタンドなどエネルギー供給。市内15事業所のうち13事業所が被災。海の近くに事業所があった。海を中心とした町。どのように復興していったらよいかみなさんと考えていきたい。スローフードの活動もしている。気仙沼のよさも知っている。東京から気仙沼を盛り上げたいと帰ってきた。気仙沼を盛り上げたい。

武山委員：今は東京で暮らしている。PR、商業デザイン製作の会社。高校を出てから東京に出ている。唐桑にいる丁稚さんが坂道をリヤカーで押していたら、まわりの人が後ろから押してくれる、という話を聞いた。その意味を考えていた。30 過ぎて、自分は後ろから押す人になろうと考えた。今回の役割もそう考えている。後ろから押すのは、前の人をがけから落とすこともできるし、手を離すと坂道を転がり落ちることにもなる。会議では、事務局の人が後ろから押しているの、事務局の役割も重要。一緒にやっていきたい。

千田委員：73歳だが、半分の年齢のつもりでがんばっていききたい。25 歳から商売を始めた。資金繰りが大変だった。そのためには、時間との戦いだった。市長から、予算も時間も考えなくてよいとあったが、50 年もタガだった予算と時間はずすのは、難しいが、若返ったつもりでがんばりたい。

千葉委員：インドで3ヶ月暮らす生活。戻ってきて、今は、色々な団体と一緒に動いている。コミュニティを大切にする視点、環境の問題などにコメントできればと考えている。

畠山委員：NPO 法人。後ろ向きな性格。得意分野は他団体とのつながりを作ること。被災したが、すでに入ってきていた団体と一緒に活動してきた。

【被災状況説明】

資料7に基づき、市長より被災状況説明：

浸水面積 18.65k m² 面積的には市全体の 5.6%。実は、気仙沼は森林が多い。

建物の多くは全壊。死亡は 977 名。行方不明者 442 名。総人口に占める割合は、1.9%である。30.2%が高齢者。70 歳以上が死亡者の 50%弱を占める。

漁港 第一種漁港 31 港 第二種漁港6港など全港が沈下

地盤沈下 全体に沈んでいる。低いところだけでなく、高いところも沈んでいる。

沈下だけでなく、4.4m 東南東に移動している。地図を作り直す必要ある。

小学校 21 校のうち津波による被災3校のみ。すでに1校を除き授業再開。どうして3校のみで

済んだのか、と聞かれる。「気仙沼は平らなところが少ないので、平らなところは産業にあって、学校は上にあげていた」と答えている。

国民健康保険加入者が急増。解雇による。財政的に将来像が描けない状況にある。

地域コミュニティ：自治会館はかなり流失全壊。自治組織がしっかりしていて自治会館がある唐桑と本吉では、被災状況がすぐ把握できた。自治会館の機能は重要だと今回のことであらためて考えるようになった。

避難所：最大時20,000人だった。ここから推計した仮設住宅の数は3,000必要だったが、実際の申し込み数も近い数字になっている。やや申し込みの方が多いため、一世帯6人で2DKに入れれないというケースなどがあるため。現在、1,000強がまだ足りない状況。

旧気仙沼地域が作れていない。場所がない。他の地域に作って、スクールバス等のサポートをする。

交通：鉄道の復旧は大きな課題。JR気仙沼線は全線不通で、バスの振替輸送をしている。

航路は、汽船がすべて被災したが、フェリーを借り上げて運行している。

行財政体制：平成23年度の災害関連予算が、294億50百万円 瓦礫撤去・復旧、死亡慶弔金等。他の自治体からの応援職員が来てくれてまわっている。

【主な論点】

資料7を用いて、企画部長から説明。

柱は8つだが、これらが全てではなく、柱間で共通の問題やグレーゾーンもあるという意見を復興会議からもらっている。

1つの参考という位置づけである。

議長：一言で「復興」と言っても、様々な論点がある。どのように委員会を進めていったらよいか。

<トイレ休憩：5分>

齋藤委員：議論を総論と各論に分けては？事前の情報で、千田委員のようにビジョンを持ってらっしゃる委員もいる。千田委員に現在持っているビジョンを時間を決めて語っていただければどうか。その話をうかがってから、資料6のようなテーマ別に各論を議論していったらどうか。今回を単に顔合わせに終わらず、千田委員だけでなく、それぞれ手短かにビジョンを語ってはどうか。

議長：今日については、そのように進めたいと思うが、今後について、何か意見はないか。

市長：毎日やっていると、様々な問題があることが頭に入っているが、今回は、全体ビジョンを話してもらって、次回からは柱のテーマごとに議論を進めてもらってはどうか。テーマによって、時間がかかるものは、2回ずつ議論するなど、強弱をつけていくようなことをイメージしていた。

議長：私の意見も、齋藤委員も市長も、次回から、資料6の柱をつぶしていくべき、というものだと思う。会議の開催は、5～6回では終わらないのではないかと。1回の会議を2時間というのももったいない。土日どちらか1日をかけてやるということも考えられる。

サブリーダー：次回は7月のアタマという提案もあったが、もっと早くやるということも考えられる。

武山委員：気仙沼市の方中心で決めてもらいたい。

千葉委員：火曜と土曜は仕事を休めない。

千田委員：9月までとなっているが、復興会議に先行するようできるだけ前半で意見をまとめておくことが重要。

議長：みなさんうなずいていらっしゃるの、できるだけ7月に議論をしていきたい。

副市長：復興会議は、7月10日から20日で調整している。役所だが、復興会議は日曜にやった。遠慮なく土日に設定していただいてもかまわない。夜間でも。柱は、若干の文言修正があるかもしれないが、一応、この柱で復興会議の了承は得ているので、復興会議は、この柱で議論を進めていくことになる。庁内にこの柱にそって、検討チームをつくる。1チーム10人くらいで、その中に学識の先生も加わっていただき各論の議論をつめていく。市民委員のみなさまも、ご希望があれば、そちらのチームに加わっていただきたい。

議長：柱に対して意見があれば。

サブリーダー：次回までに柱ごとにブレインストーミングして、柱ごとの課題をもっとたくさん出して、次回議論してはどうか。まだ、全然課題が少ない。

小山(裕)委員：専門でない分野もあるので、ある程度、事前に次回議論する柱についてのたたき台をもらって、準備して議論した方がよいのではないかな。

議長：次回分のたたき台を説明してもらって、宿題として持って帰ってはどうか。

サブリーダー：あわせて、議論する柱について、インターネットで意見募集してはどうか。

千田委員：今回は、各委員から、自分が重要だと思うことを15分くらいずつ意見をもらってはどうか。柱にこだわらず。会議の時に、終わりの時間を決めてもらいたい。後の予定があると中座することになり、申し訳ないので。

千葉委員：サブリーダーの小野寺委員の提案したブレインストーミングは非常に有効だと思う。批判の代わりに提案を出していく。合理的な方法はあるか。

サブリーダー：インターネットを使えば、フェイスブックなどにグループを作り、スレッドを立てて、意見交換をするという方法もある。

<千田委員退席>

議長：では、次回、千田委員をはじめ、みなさんのお考えを聞くということでよいか。一人5分から10分くらいで、何が緊急性があり重要と考えているか、ということをお話してもらいたい。一番初めに千田委員の話をお聞きする。その上で、柱1についての宿題をレクチャーいただいて、3回目に入りたい。会議は次回4時間、その後からは3時間くらいのペースで進めたい。

副市長：復興会議の意見を紹介させてもらう。柱の中の課題が少ないという意見がサブリーダーからもあったが、柱の中の課題について意見があった。被災地観光という視点など。時間軸の話も復興会議からも出ている。まずは、何が重要化ということ。関係論ということもあった。柱1と柱2の関係など。そのあたりも議論していくという話になっている。

サブリーダー：建築制限区域について、公有地化があるかどうかで議論が変わってくると思うが、それを前提に話してよいか。

副市長：難しい問題。産業の中心部が地盤沈下している。市としては、国に全部買い上げて欲しいと要望している。国の方でも、一時検討する、と報道されたが、その後進展がないので困っている。公有地化でなく、かさ上げを前提に話していただいてもよいのかも。高台移転もあるが、お金がかかる。しかし、財源論は抜きにして、議論いただいてよい。その後、行政として、要望すべきことは要望して、実行力を担保していく。

サブリーダー：県の会議では、委員の意見の中に前提としていることを書いているということもあった。そういうことも必要か。

議長：しかし、すべて公有地化を前提にしてしまうと、前提が崩れたときにすべて崩れてしまう。

副市長：公有地化の議論はストップしているので、とにかくかさ上げを前提にしていく。保有は国になるかどうかは別として。

木戸浦委員：資料3の裏に、市街地復興パターンの検討調査の主旨に、国が復興計画を策定するものではありません、と書いてあるが、逆に国の提案はあるのか。

副市長：国には、復興のビジョンを描いてくれるよう要望している。そして、そのビジョンには、必要な予算を書いてほしいと言っている。国は、もちろん計画を立てるが、市の計画は市で立てるという意味。

木戸浦委員：資料6は、味気ない。どの方向に進めばよいのかわからない。1～6まで輪になってなければならないと思うが、どちらの方向に進むのかわからないので、議論すべきことがぼんやりしてしまっているのでは。国がどっちに進もうとしているのか、どちらの方向なら国の支援やサポートが得られ易いのか、というようなことはないのか。

副市長：国の議論は、二元的なものになりがち。地方で重要なのは各論。各論重視で行く。全体をつなげる考え方・理念は必要だが。震災前に戻すのか、震災前以上にもっていくのか。国が地方に合わせるようにしてもらいたいと要望している。

議長：国が地方のことを考えるのではなく、我々が国が応援したいと思うようなものを作っていく必要があるのではないかと。柱も、味気ないものを肉付けしていくのは、この委員会の役割ではないか。次回、各自の思いを話してもらい、3回目から柱をつぶしていき、できるだけ一通りの議論を終える。次回の各自のプレゼンでは、優先順位なども話してもらいたい。

サブリーダー：次回、柱1だけだと時間がないので、市の方で宿題は、2つずつくらい準備しておいてもらいたい。

【市民意見の把握について】

議長：市民意見の把握については、サイトでの意見募集という案があったが。

副市長：市のHPはあるが、市のHPがよいのか市民委員会のページがよいのか。意見をもらいたい。市のHPだと意見を出しにくいのではないかと。検索で、市民委員会を打てば、すぐにたどりつけるような形にするなど。

齋藤委員：ITは最後に考えるべきではないか。何人がインターネットにアクセスできているのか。60歳以上が30%以上を占める気仙沼で、ITを主とすることは反対。運営の問題もある。スパム的なものも多くなるので、集約も難しい。今回の震災で、ITが意外に役に立たないという感じを持っている。情報格差をなくすためにも、まずはIT抜きで、小集会等で直接意見を吸い上げていく。

小山(和)委員：ネット環境が繋がっていない。固定電話もつながったばかり。高齢者の方も意見が出せない。自治会で用紙を配って意見を書いてもらうのが、意見を集めやすい方法。

小山(裕)委員：吸い上げることも重要だが、市民の不安は、情報がないこと。この会も、情報を公開することが重要。三陸新報は90%が読んでいる。連携も考えられるのでは。

武山委員：ここで全部を把握しなくてもよいのではないかと。事務局も、自治会館などで、ヒアリングしてきて傾向を把握する程度でよいのではないかと。

畠山委員：アンケート調査は手間になる。ノックノックで眠れない人がいることも考えてもらいたい。やはり、一回で済むように社協をかませることはできないか。

議長：一度、社協の意見も聞いてみる必要がある。社協も手一杯というところがある。

千葉委員：社協も、支援団体ともっと横のつながりを持ちたいという意見もある。

議長：アンケートも、重ならないように、まとめてどのようにやるか。毎回、柱のテーマだけでなく、その他、進め方など、みなさんが意見を出せるようにして進めていく。

副市長：インターネットオンリーにする気持ちはない。サブ的に活用していく。通常、月2回出している広報で案内をして意見を募集する。そういうことも合わせて考えていく。避難所に大きく拡大して張り出して広報しているものもある。こうしたものも活用していく。

子どもの意見もなんらかの形でとっていきたい。絵や作文など。次回、その方法なども議論していただきたい。

議長：「伝える」と「聞く」は重要なポイントなので、次回、もう一度方法について議論したい。

齋藤委員：アンケートの収集方法などは、コンサルティング会社に投げて、案を出してもらおうということもある。畠山委員や千葉委員が、ボランティア団体の参加と言っているが、そうした人たちを入れることで、何がよくなるのか。単に多くの意見を聞くというだけでなく、具体的なメリットを明確にしてもらおうとわかりやすい。

千葉委員：自分が関与している関係では、コミュニティハウスが流されていて、コミュニティハウスを通じて活動してきた人たちの人間関係が、避難所運営の受け皿になった。こうしたことにコミットしてきた団体が、今後、5年から10年のスパンで今後関わってほしいという人たちがいる。外部から多くのアイデアをもらうことも必要。

畠山委員：色々なアイデアが得られることと、被災者が入っていて、状況がわかっている。それぞれが得意分野を持っている。細かな支援や情報をくれる。唐桑では、支援団体がかぶらないように全戸をまわって、ニーズを吸い上げている。きちんと住民とコミュニケーションをとれる人たちが来ている。

千葉委員：NPOにも色々いる。全部とは言えない。

齋藤委員：どういう背景でご意見されたのかわかった。今の意見では、地域コミュニティの問題に関係するので、その回に来ていただくということで解決できるのではないかと。

企画部長：アンケートは、資料3の裏面にあるように、国交省の予算で実施する。これを活用したい。

議長：そのアンケートの実施に関わるプロに提案をもらってほしい。ボランティア団体や社協の意見も聞いていくということで進めたい。復興のビジョンと復旧がミスマッチになってしまう可能性がある。復旧について、作戦会議をして、ボランティアの人たちに示していく。その復旧計画を復興につなげていく、ということが重要。

副市長：復旧は、私どもの取組をつぶさに伝えていくことが必要。今回の計画は、9月までの非常に短い期間でつくる。当初、国が6月までにビジョンを示す、市が9月までにビジョンを示し、それに基づいて県が計画をつくるということになっていた。しかし、国の財源がみえなくなっている。今、9月までにどこまでできるかと考えると、全体と各論のマスタープラン的なもの。各論の詳細については、9月以降ではないか。どこに道路を通すのかなど。二段階の議論が必要になってくる。みなさまには引き続き、議論にご参加いただきたい。

齋藤委員：国の復興プランについて、財源が重要という話があった。主体的なところは、我々でということだと思う。県も模索していて、高台移転などの案を出しているが、県のプランやガイドラインなどは、どの程度市の計画に影響するのか。

副市長：財源が大きい。国・県がつくる計画と別物でもかまわないが、財源がこの地域だけではまかなえないという問題がある。そのため、国や県に当市の要望を訴えて、国・県の計画に気仙沼に必要なキーワードが入るように働きかけている。国・県の計画に乗ったものを活用していくことも必要になってくる。

議長：次回の日程を決めて終わりたい。

6月26日(日)13時～

以降は7月アタマからスケジュール調整をする。メール・FAXで日程表送付。

今回は、各自の発表。柱1と2のレクチャー。意見が出しやすいような下地づくり。意見集約の手法について、専門家からの意見。

以上